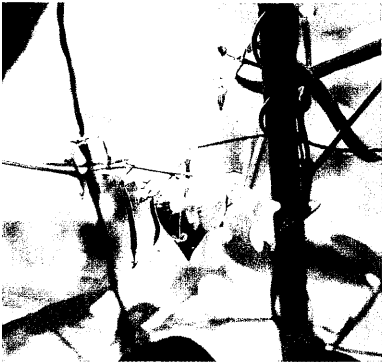
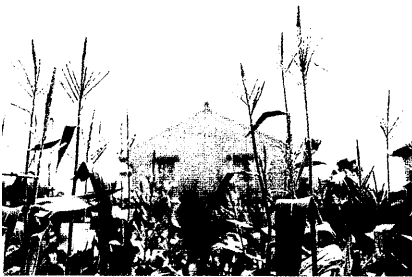




ボツ



ン



楽しむ
的な日々



ハイヤ



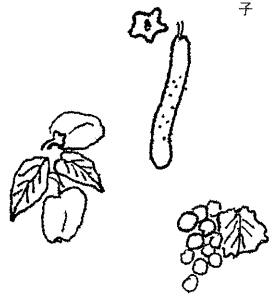
トウモロコシ



キュウリ

素晴らしき家庭菜園
 生長に一喜一憂
 育てる楽しみ
 ごほうびの収穫
 畑を借りたり、道具を揃えたり、
 勤めの合間の農作業……
 家庭菜園はとかくハードルが高いと
 思われがちだけど。自分ならではの
 方法を見つけて一歩踏み出してみよう。

教えてくれた人・竹間忠夫
 撮影・今津聡子 取材と文・井上昌野





キャ



イン



生な
実豊か
日本編



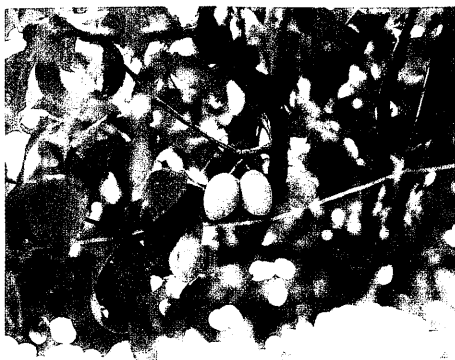
モロ



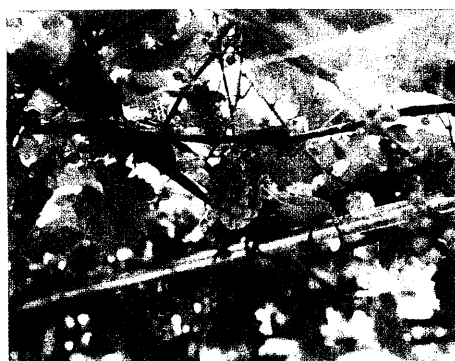
トマト



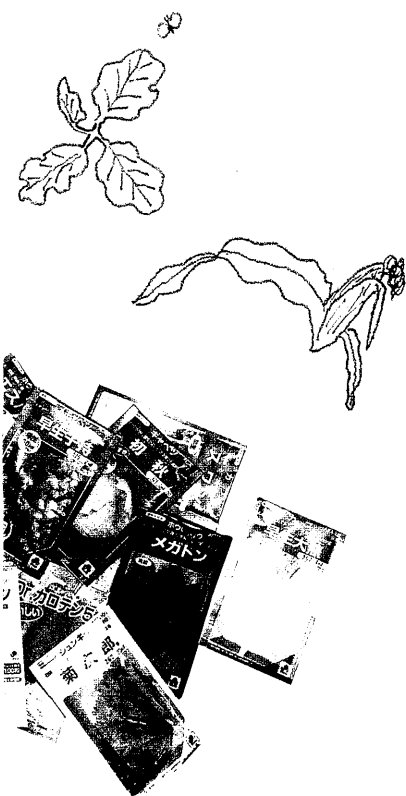
パプリカ



プラム



ブドウ



「自宅と菜園が近いこと。 自転車で30分までがいいところ」

ようこそ！ 家庭菜園ワールドへ

野菜を育てることに夢中になって
いる人を「家庭菜園人」とでも呼ば
うか。彼らは、春夏秋冬という1年
のリズムに乗って、ダイコンやハク
サイ、キュウリやナスを育て、食べ
る。このなんべんも巡る、大いなる
繰り返しを飽くことなく謳歌する。

家庭菜園人の一人、竹間忠夫さん
は20年にわたり、菜園で野菜をつく
り、日々食べている。そもそも、竹
間さんと家庭菜園との出会いは、1
989年に埼玉県所沢に越して来た
ときに始まる。たまたま裏庭でミニ
トマトを栽培し、大収穫にほくそ笑
んでいたら、隣人から「畑をやりま
せんか？」という誘いの一言が。こ
れによって家庭菜園人の一歩を踏み
出すことになる。

近くの茶畑だった土地を、地主さ
んの好意で貸してもらい、近所の知
り合いと共有し、おのおのが好きな
ように自分のスペースを耕す、いわ
ば共同農園のようなスタイル。その
菜園は、ほとんど楽園。7月の陽射
しのなか、ゴーヤやインゲン、カボ
チャなどの楚々とした花々が咲き誇
り、実を結び始めているものもある。
収穫されるのを待っているかのよう
なキュウリやナスは、キラキラと輝
く。トウモロコシもあと一息。ふぞ
ろいの形、虫喰いの葉、どれ一つと
して同じ姿の野菜はない。その合間
を蝶が舞い、てんとう虫が歩く。空
からは鳥のさえずり、目の前に広が
る緑が躍り、匂い立つ。竹間さんが
自慢に思うのも、ムリはない。

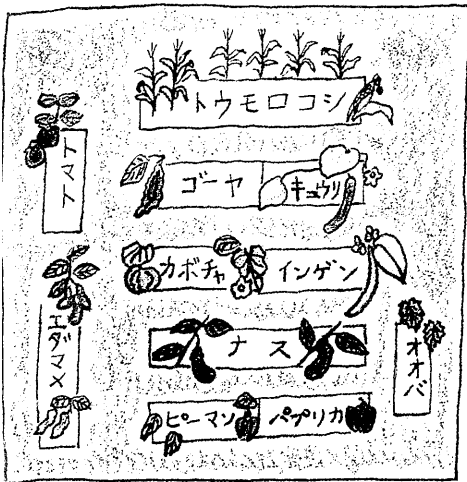
その竹間さんが、開口一番、「家庭
菜園を始めるには、できるだけ長く
借りられる場所を見つけないこと」、
重要機密をこっそり打ち明けるよう
に教えてくれた。「自治体が貸して
くれる市民農園でも、使用期間が2年
以上あれば、いろいろな野菜がつく
れるけど、1年しかない」と、面白さ
がわかったところでおしまい。その
心は？「最初は、訳もわからずにや
る。それでなんとか様子がつかめた
ところで、次からはこうしようと思
う。それで2年目に再挑戦するんだ
よ！」。そう、この「失敗とリベンジ」
の輪にハマると、もう引き返せない。

「来年こそは！」が、翌年も翌々年も
続いて（あとはご想像の通り）。
それから、と続けて「自宅と菜園
が近いこと。自転車で30分までがい
いところかな」と言う。竹間さんの
場合は、自転車で2分の距離。愛犬
タローの散歩がてら毎日、菜園を覗
く。しかし覗くだけでは終わらずに、
結局草取りや虫取りなど何かしらや
って、小一時間経ったころ、タロー
と収穫物を抱えて家路につくことに
なる。「野菜の生長ぶりは刻々と変わ
るから、世話をしないわけにはいか
ない。とくに生長が早い夏野菜の場
合は、毎日収穫すれば、一番おいし
いときに食べられる」となると、マ
メに世話ができる「通える距離にな
るのも頷ける」。

もし近所に空いていそうな場所が
あったら、それとなく探ってみるの
がいい。地主さんと顔見知りになっ
たり、隣近所に「野菜を育てたい」
と言い回るのも、手近な場所を見つ
けるポイントだね、と竹間さん。

季節ごとの畑の顔

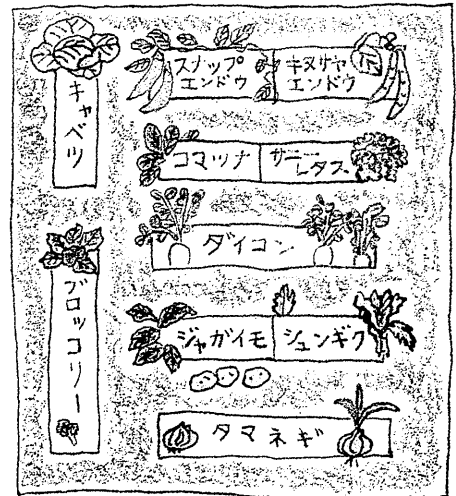
夏野菜の畑



秋・冬野菜の畑

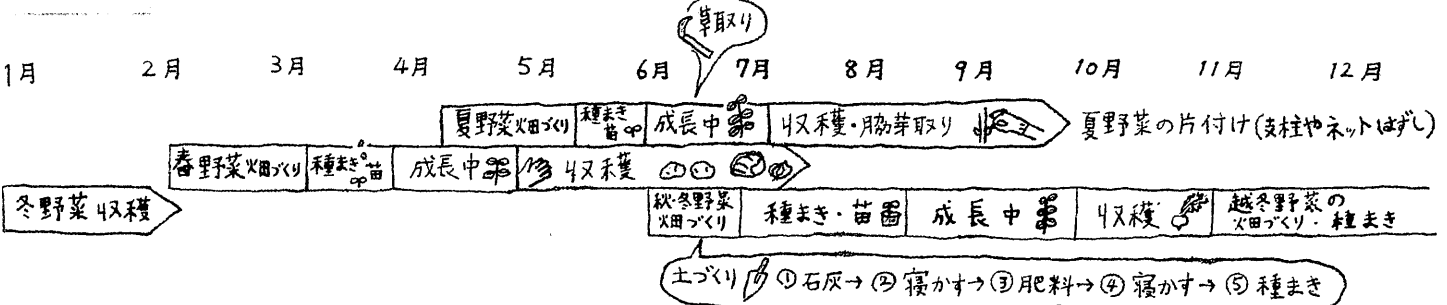


春(越冬)野菜の畑



春(越冬)野菜の収穫時期(2~5月)、夏野菜の実りの時期(7~9月)、秋・冬野菜のできる時期(11~3月)の、畑の3変化。菜園は太陽の照射しや動きも観察して、それぞれ日当たりよくしてあげるのがポイント。夏野菜の場合なら、照射しを受ける一番手前を低く、上に伸びるツルもの、背丈を取るトウモロコシなどだんだん高くしていくと、まんべんなく日が当たる

畑の1年



「全部ひっくりめて『つらいけど楽しい』
と思えた人は野菜づくりにはまる」

春(越冬)野菜、夏野菜、秋・冬野菜の実りに向けて、「土づくり→種まき&苗植え→成長中の草取り、虫取り→収穫→片付け」という作業の流れは、各時期だいたい同じ。実る時期によって始める時期が違うだけ。ポイントは「逆算」。最終ゴールは実りの時期なので、そこから種を蒔く時期を割り出せば、おのずと土づくりを始める頃合いがわかる。狭い菜園の場合、収穫の途中でも次の野菜づくりの準備を始めるために、抜いてしまう事態になることも

辛いけど辛い、のか？
辛いけど楽しい、のか？

竹間さんは、家庭菜園の本を参考にしたり、仲間にあドバイスもらいなから、手探りで野菜づくりの経験を重ねていった。

「蒔いた種を全部間引いちゃったり、球根のように深く埋めてしまったり、土に鋤き込む肥料を直接やって腐らせたり、失敗は数知れず。でもね、それがノウハウになるので、今や何があっても大丈夫かも覚えていないね」

20年のベテラン家庭菜園人は笑う。そして実った野菜については、至ってお気楽ご都合主義を貫く。

「生長が良くなかったり、実りがイマイチだったりするときの原因は、すべて天気のせいにする(笑)。だって何が悪かったかなんてわかんない。良くできた年と同じようにやっているんだからね。でも、うまくできたときは自分の実力と自慢する！」

菜園でやるべき作業は際限ない。農薬を使わなければ虫が湧き、病気がはびこる。目を放した際に雑草が侵蝕する。除草剤や殺虫剤を取って使わないのは、「そういう野菜なら買ったものと同じでしょ。せっかくなら使わずにやってみよう。自分が食べたいものを好きな量だけ育てるといのが、家庭菜園の黄金律。『売り物じゃないんだから形や色も、多少の虫食いは気にしない。だけど病気は、どうしようにもできない！病原が他の野菜に広がらないように抜いてしまおうしかない』と、潔くあきらめること、こだわるこのバランスに気づかせてくれる。

家庭菜園ルック



まずは土づくりから

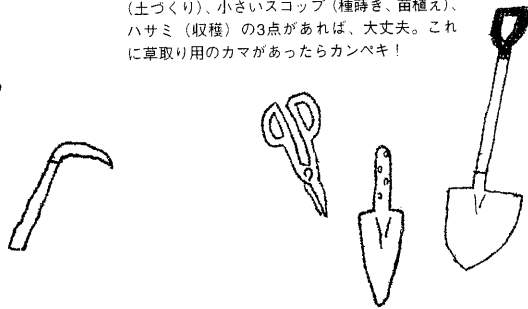
育つ土台が元気なら、健康でおいしい実りが約束されたも同然！ 種を蒔く前にまず土づくり。野菜は一般的に、中性あるいはアルカリ性の土壌を好む。土は酸性になっている傾向があるので、バランスを取るためにアルカリ成分である石灰をまぜて、1週間くらい置く。次に有機肥料を銚き込む（土に混ぜる）。土に空気を混ぜるように、シャベルなどで少し掘り返す感じで。そしてだいたい1週間置いてから、畝をつくる

夏は暑いけど長そでが正解。



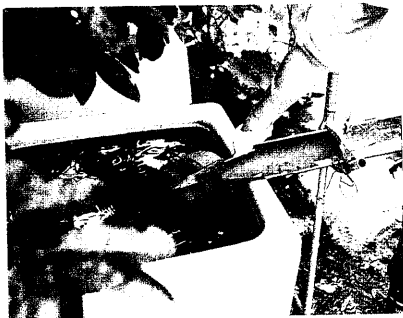
道具、初心者3点セット

初めて菜園に立つビギナーは、大きいシャベル（土づくり）、小さいスコップ（種蒔き、苗植え）、ハサミ（収穫）の3点があれば、大丈夫。これに草取り用のカマがあったらカンペキ！



モノグサ草取り

最重要事項の草取りは、ネを上げずに、根を抜くことが肝心。細かい草は週に1回、「モノグサガマ」で土の表面を銚く。その後クマデでかき集めて、最後は手で拾う

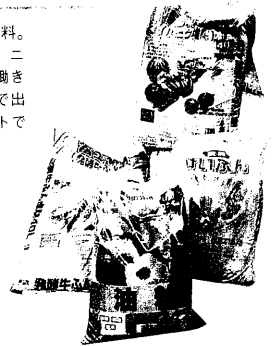


水やりは雨水で

畑に水道がない場合、水運びが大変。そこで、いらなくなったバスタブやゴミバケツなどに、降った雨水を溜めて使えば十分。好天が続く夏以外は、それほど水やりの必要はない

有機肥料いろいろ

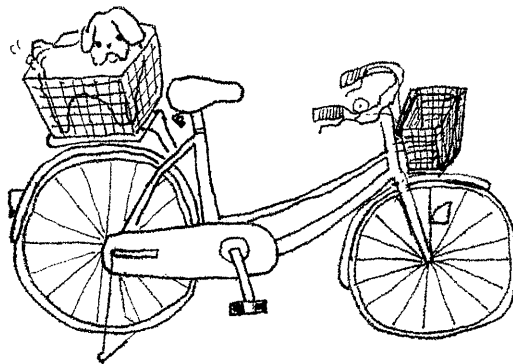
土づくりに欠かせないのが有機肥料。市販されている石灰、ウシの糞、ニワトリの糞、油かすなどを土に銚き込む。竹間さんは、この他に家へ出た野菜屑や生ゴミも、コンポストで肥料にかえている



竹間忠夫

ちくまたお 1949年、東京都生まれ。経済ジャーナリスト。主著に『101人の起業物語 彼らはなぜ成功したのか？』（光文社）、『ヒット商品 ネーミングの秘密』（講談社）など。近著に『家庭菜園 この素晴らしい世界』（講談社）がある。

いっも畑に連れてくるタロー



土をつくり、畝をつくって種を蒔く。天から降り注ぐ陽の光に感謝し、雨を待ちわびる。そうして蒔いた種が生長していく様子を見られることのほうが収穫より楽しいと喜ぶ。「始めたころは野菜の実り方とか咲いた花を見て、感動がたくさんあったね。今はもう慣れたけど」と言いながら、「オクラの花って一番きれいだ。咲いてないのが残念だな」と悔しがらる。菜園の費用は、肥料代、地主さんへのお礼、道具などコミコミで年間約5万円程度。「趣味にしちゃ、安いでしょ」と、これまたご満悦の様子。「野菜づくりは自分の空いた時間、気が向いたときにやればいいという趣味じゃない。やるべき時期にやるべき作業をしないと、野菜は育たない。自然は待っててくれないからね」竹間さんは毎日菜園に足を運ぶものの、大きな作業は土曜日にと決めている。だからこそ計画をもって、効率よく作業できるように挑む（それもまた、やりくり上手を求められるようで嬉々とした感じ）。「地道にやるしかない雑草抜きや虫取りは、できればやりたくないのがホッネ。でも、野菜の生長を見る楽しさ、収穫したときの満足感、そしてつらい作業も全部ひっくるめて『つらいけど楽しい』と思えた人は野菜づくりにはまる。やってみて『楽しいけどつらい』だったらやめたほうがいいんじゃないの？」とズバリ。それって野菜づくりだけのことじゃないのでは？——奥深し。菜園は、ナルホド底なしに面白そうだなと思ったアナタ、「家庭菜園人」の血が流れているかも？